茨城県立水戸第一高等学校
硬式野球部後援会
三の丸倶楽部会報

入　魂

第２２号

平成３１年３月１日

発行人　事務局長　森　利克
316-0026
日立市みかの原町 2-15-8
TEL/FAX：　0294-53-1351
E-mail：ihm2158@ak.wakwak.com

Ⅰ　水戸一高創立１４０周年記念試合レポート

昨年の11月18日、ノーブルホームスタジアム水戸（旧水戸市民球場）にて、作新学院を招いて水戸一高創立１４０周年記念試合を開催しました。当日の模様などをご報告いたします。

水府倶楽部　船橋　信正

＜開催までの道のり＞

水府倶楽部幹事による記念試合の発案は２年以上遡る平成２８年の秋。幹事会で開催に向けた方向性が確認されると、竹内監督・小島部長とも連携しながら、対戦相手校・開催日・球場などを決定すべく調整に着手しました。途中難航しながらも概要が固まったのちは、水戸一高や知道会との協議を経て、「水戸一高創立１４０周年記念事業」の一環として開催されることが決まりました。

平成３０年４月には、水府倶楽部会員十数名による実行委員会を立ち上げ、以降８回に亘る協議を経て事前のアナウンスや当日の運営の詳細などを決定していきました。なお、「子供たちに水戸一高硬式野球部のことをもっと知って欲しい」との思いから、同封しましたパンフレットについては、９月に県内中学校や少年野球チーム(少年団、シニアなど)に発送しました。

＜当日朝の様子＞

１週間前の時点では悪天候の予報でしたが、当日は穏やかな晴天に恵まれ、早朝６時に開催が正式に決定。水府倶楽部約６０名のほか父母会、三の丸倶楽部からの運営協力者が早朝に集合し、それぞれの持ち場に分かれて開場前の準備を行いました。

８時前には作新学院野球部が到着。夏の甲子園８年連続出場中、この秋には栃木県大会で準優勝し関東大会に出場した強豪です。３塁側の作新学院がウォーミングアップを開始すると、球場の緊張感が一気に高まりました。

そして８時３０分にはいよいよ開場。開場待ちの高校野球ファンもいました。入り口付近では、記念試合パンフレットと両校選手名簿を入場者に配布しました。また、三の丸倶楽部幹事の方から三の丸倶楽部の案内と会員勧誘を行っていただきました。

＜開会式＞

９時３０分からは開会式を執り行いました。水府倶楽部和知幹事長、水戸一高鈴木校長から主催者挨拶を行ったのち、来賓を代表して大井川茨城県知事からご挨拶をいただきました。その後、両校の校歌演奏・校旗掲揚を行いました。

鈴木校長の主催者挨拶

＜始球式～試合開始＞

両校シートノックを経て１０時３０分に試合開始の整列。この頃には観客もかなり増えてきました（およそ１，５００人）。バックネット裏に特別に用意した少年野球チーム用のシートには野球少年たちの姿も見えました。

飛田家（飛田穂洲先生ご一族）代表の飛田憲生氏による始球式の後、先攻作新学院でプレイボール。

＜試合の模様＞

水戸一高の先発投手はエース片根（２年）。初回は走者を背負いながら中軸を打ち取り無失点で切り抜けたものの、２回表には３連打を浴び２点を失います。対する水戸一高の攻撃は、２回裏、蒲原（２年）、黒崎（２年）が作新学院の主戦投手宇賀神（２年）に連打を浴びせ、１死二、三塁の好機を作るものの後続が続かず無得点に終わります。すると、３回表、作新学院の攻撃では四球とエラーが絡み２失点、４回表にもこの回途中からマウンドに上がった飯村（２年）が連打を許し３失点。前半で７点差をつけられてしまいます。

しかし、５回からマウンドに上がった佐次（１年）が見せ場を作ります。緩急を織り交ぜ作新学院打線に的を絞らせず５回、６回と無安打無失点。７回も無失点で切り抜け３イニング続けてスコアボードに「０」を並べます。一方、水戸一高打線は、安打こそ出るもののなかなか作新学院の投手陣を打ち崩せず、7回裏も得点圏に走者を進めますがあと一本が出ません。すると８回表、ついに佐次が作新打線につかまり３失点を許してしまいます。８回裏には古谷（１年）がこの日２本目の安打を放ちますが得点には至らず、結局このまま試合は終了。０－１０で敗戦となりました。

好投した佐次君

作新学院宇賀神君

＜戦評＞

作新学院は、攻守とも派手さはないものの、打撃では甘い球を確実にミートして安打を重ねる一方、守りは堅く、相手に流れを渡しませんでした。攻守交代時のダッシュなどプレー以外の姿勢も見習うべきところが多々ありました。

対する水戸一高は、決して安打が出ないわけではなく（６安打）、得点機も複数回作りましたが決定打が出ませんでした。守備ではある程度の安打を打たれるのはやむなしとしても、エラーや四球が無用な失点につながった印象です。このような一つ一つの積み重ねが強豪との差なのだと実感しました。一方、佐次投手の好投や２安打の古谷をはじめクリーンナップがそれぞれ安打を放つなど主力選手が強豪相手に力を発揮した点は収穫であったと考えて良いでしょう。

＜閉会式＞

試合終了後、閉会式が行われました。まず、知道会栗原幹事長（当時）が主催者挨拶を行ったのち、飛田憲生氏から作新学院石井主将に記念品が贈呈されました。記念品は飛田穂洲先生の生誕百周年を記念して昭和６１年に創設された「飛田穂洲楯」で、毎年春の高校野球茨城県大会閉会式で優勝校に贈呈されているものです。

飛田氏から記念品の贈呈

続いて、優秀選手賞の表彰が行われました。優秀選手賞は作新学院池田選手と水戸一高蒲原主将、勝利チームから１名選ばれる最優秀選手賞は、作新学院酒澤選手に授与されました。

閉会式終了後には、両校および関係者にて記念撮影が行われ、記念試合の一連の行程は盛会裏に終了となりました。

最優秀選手賞を授与する森事務局長

＜その後＞

両校選手たちは、昼食後、親善試合としてもう一試合行いました。

親善試合終了後、作新学院小針監督から水戸一高の選手たちに訓示をいただく機会がありました。後日、選手たちの話を聞くと、この言葉に思いを新たにする選手も多かったようです。

翌日には、茨城新聞、毎日新聞などでこの記念試合の模様が伝えられました。特に、11月27日の報知新聞には特集記事としてほぼ1面の紙面を割かれました。

＜最後に＞

まずは、この記念試合を後援いただいた三の丸倶楽部様をはじめ、記念試合の開催にあたりご協力をいただいた皆様に心より御礼申し上げます。

小針監督　竹内監督
黒木実行委員長

記念試合という舞台で強豪作新学院と

対戦した経験を、現役の部員たちはどのように捉えているのでしょうか。部員ひとり一人の考えや行動に何らかの前向きな反応が起こることを期待しています。また、記念試合やパンフレットを見てくれた子供たちの一人でも多くが「水戸一高で野球をやってみたい」と考えるきっかけになることを心から祈念しています。

創立１４０周年記念試合に学ぶ

折橋副主将　　蒲原主将　　吉川副主将

◇副主将　二年　吉川　俊

「０－１０」、自分たちと全国との差をこれほどくっきりと表すスコアはない。作新学院は言わずと知れた強豪校であるが、近年強豪校で増えている長打を狙ったパワー野球ではなく、細かいところにも行き届いたすきのない野球をしてきた。まさに高校野球といえるような戦い方であった。まるで私達に「これが全国で勝負するための戦い方だ。」とプレーで語っているようであった。

前述の通り、最近の高校野球はパワー野球が流行している。だが、それを逆手に取り、緻密な野球を展開し、勝つことができるのは作新学院のような、そして水戸一高のような高校ではないだろうか。

今回の記念試合のパンフレットには、水戸一高の甲子園出場が私達が生まれるずっと以前になされ、近年における甲子園出場の文字はない。次の１５０周年パンフレットには、水戸一高の紹介に甲子園出場が刻まれるようにチーム作りをしていきたい。

次に作新学院対水戸一高となるのは、師走の声が聞こえる１１月ではなく、蝉の声が聞こえる８月に高校野球の頂点を決める戦いができるように、これからも精進していく。

最後に、今回の１４０周年記念試合の開催に携わっていただいた皆様、本当にありがとうございました。

◇副主将　一年　折橋　秀哉

自分は、今回の記念試合で、作新学院の「負けない強さ」というものを感じました。その「負けない強さ」を生んでいるもの、それが今の自分達に足りないものであり、水戸一高野球部の原点とすべきことなのではないかと思います。 作新学院の選手達は、誰でもできることを誰にもできないくらいしっかりやっていました。例えば、試合前のキャッチボールでは、全選手が全球握り替えまでやり、試合が終わってからバスに乗るまでの時間は、おそらく今までのチームで１番速かったです。全員がやるべきことをしっかりやっているからこそ、グラウンド内で選手が同調し、「負けない強さ」が生まれているのだと感じました。

それに対して、自分達はやるべきことをやりきれていないと思います。一人ひとりがやるべきことは分かっていても、それを実行する力が弱いと感じます。やらなくてはいけないと思ったことを思ったままにするのではなく、実行していくことが自分達が勝つための大前提です。そのためには、一人ひとりが全力でやらなくてはいけません。自分が考える全力でやるというのは、ただがむしゃらにやるということではなく、一人ひとりが持っている能力を、チームが勝つために最大限に使うということです。一人ひとりが自分の能力を最大限に発揮すれば、おのずと行動に現れ、勝つための環境が生まれると思います。そして、その環境が「負けない強さ」を生むはずです。

自分が前述したようにチームを強くしていくためには、長い時間がかかります。そこで大事なのは、１日１日を無駄にしないこと、１分も無駄にしないこと、そして一球一球に集中することです。これが、飛田穂洲先生の教えである「一球入魂」なのではないでしょうか。作新学院との試合で気づかされた、水戸一高野球部の原点でもある「一球入魂」を胸に刻んで、練習に励んでいきます。

Ⅱ　平成３０年度後半　活動報告　　事務局長　森　利克

前会報第２１号発行（平成３０年９月１日）以降の活動状況についてご報告します。

（１）会報第２２号をお届けしました。今回の巻頭記事では、昨年１１月１８日（日）に開催された水戸一高創立１４０周年記念試合について採りあげました。また、このたび日展で特賞（文部大臣賞）を受賞された水戸一高硬式野球部元顧問町田博文先生に寄稿いただきました。シリーズ記事「大学野球を目指す後輩部員たちへ」は仙台六大学野球連盟に所属する東北大学で一年生からレギュラーとして活躍中の吉田幸一郎君（平成２８年卒）にお願いしました。

（２）１４０周年記念試合では、費用的に後援者として協力し、入会案内、会報を配布して三の丸倶楽部の広報に努めました。

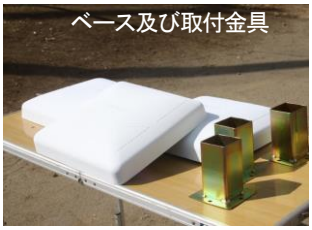
（３）会員拡充策の一環として、７月末に引退した３年生部員の父母会の皆様へ入会案内を配布し３名の方々に入会いただきました。また、奨学会総会においても幹事が広報に務めました。昨年末現在の会員数は１８２名。元会員（退会、２年以上会費未納）は１２３名、計３０５名です。

（３）野球部支援として、幹事会で承認された以下３件について会費から支出しました。

①コーチ謝礼９万円（９ケ月分）

②１４０周年記念試合後援費１０万円

③ベース一式、防球ネット１基、打撃練習用防球ヘッドギア３個、計約１２万円（予定）



先月末現在の会費残高は　約３５万円です。

（４）公式戦応援では、昨年９月の秋季地区大会一回戦で緑岡に５－４で勝利したものの大会代表決定戦で水戸葵陵高に１－１１敗れ、またしても県大会出場成りませんでした。しかし、１０月の一年生大会では鹿島に８－１、緑岡に５－４で勝利し、三回戦で水城に敗れたものの今後に期待できる内容でした。応援帽子を着用した応援いただいた会員の皆様ありがとうございました。

（５）なお、平成３１年度の総会を６月９日（日）１１時から知道会館で開催する予定です。１年間の活動報告と提案・審議事項を含めたその資料は事前（５月上旬）にお届けします。

Ⅲ　特別寄稿　「顧問であったことの喜び」

町田　博文（元硬式野球部顧問）

水戸一高を定年退職してから、５年の歳月が過ぎようとしています。退職後は専ら所属する法人や茨城県美術展覧会の役職に就きながら、油絵作家としての道を歩んでいます。

作品の発表は、東京六本木の国立新美術館で毎年開催される春の「光風会展」、秋の「日展」、そして地元茨城の茨城県近代美術館で開催される「現代茨城作家美術展」などに大作を出品し、日本橋三越本店や水戸京成百貨店での個展なども絡め、制作と発表、そして役職に関わる様々な仕事に追われ、多忙な毎日を送っています。

水戸一高美術科教諭として、前任の土浦湖北高校から異動赴任したのは平成８年でした。以来１８年間本校に勤務しましたが、硬式野球部の顧問となったのは赴任３年目の平成１１年からで、退職の年まで務めさせていただきました。恥ずかしながら顧問と言っても名ばかりで、野球に関してはズブの素人。もちろん技術指導などは到底できません。ただ、高校教師として駆け出しのころ、偶然の行きがかりから前前任校竜ヶ崎南高校で野球部長を務めたことが縁となり、以降高校の硬式野球部と関わっておりましたので、当時の水戸一高管理職から「若い監督、部長の話し相手になって欲しい」とのことで顧問に就任しました。

今思えば、私が水戸一高に赴任した頃の硬式野球部は長い低迷期の最中で、進学校の普通の部活動という態であったように感じました。大会での勝ち、負けはもとより、チームとしての「求める執念」の部分に上手く手が入れられていないように感じられたからです。硬式野球部のＯＢで組織されている水府倶楽部の当時の幹部の方々が相当ヤキモキされていたことが印象に残っています。

その様な事態に、勝つことへのこだわりと面白さの観点から耕し起こす指導をされたのが前前監督でＯＢでもある藤田知巳先生（現水戸桜ノ牧高校長）でした。更に前監督中山顕先生（現日立一高監督）が頂点を目指すことへの精神と技能を部員たちに注入し続け、見事なまでに「水戸一高の野球」を確立されました。それを引き継いだ現監督竹内達郎先生が工夫、改良を加え、独自の感性で現在の野球の姿を作り上げています。

優れた能力と感覚を持った３人の監督先生によるご指導を、顧問として間近に見せていただいた長い年月は、私にとって忘れがたいものですが、一方、この間、私が生きる美術の世界へと足を踏み入れ、現在の洋画壇で注目され、活躍中の野球部ＯＢ橋本大輔君（平成２３年卒、現芸術大学大学院博士課程）も現れました。また、私の退職に伴い、その後任として赴任され、現在美術科教諭であり硬式野球部顧問でもある太田泰助先生は土浦湖北高校在任中の教え子であり、高校在学中の彼も甲子園を目指して活躍した球児でした。彼は計らずも私の意思の様なものを引継ぎ、画家として堅実な歩みを見せながら生徒の指導に当たっています。彼の指導により、平成２７年度には筑波大学芸術専門学群日本画コースに現役合格した野球部員（小松拓也君）も出ました。野球と美術は根本的に全く違う世界ですが、少なくとも水戸一高硬式野球部関係者の中に美術界で活躍する方々が居てくれることをとても嬉しく思っています。

この度、私自身の事ですが、昨年１１月、改組新第５回日展で日展作家として最高の栄誉である特賞・文部科学大臣賞を拝受することができ、こ

改組新第5回日展特選　文部科学大臣賞作品
「新雪の河畔」

れから更に励んで芸術のより高い世界を求めて進んで行くことになりました。今回の作品の取材地はチェコ南部ルネサンスの街チェスキークルムロフです。街を包み込むようにヴルタヴァ川（モルダウ）が流れ、雪の大地と人物の対比がモチーフとなっています。

水戸一高に勤務し、硬式野球部の顧問として監督、部長、顧問の先生方をはじめ、部員、マネージャー、そして父母会、水府倶楽部、三の丸倶楽部の皆様との交流の思い出は、作家として生きていても心の中に鮮明な記憶として残って行くことでしょう。そして、その事は私の人生の誇りであり、生きて行く上で大きな力となって行くことと思います。

Ⅳ　シリーズ「大学野球を目指す後輩部員たちへ」

東北大副主将　吉田幸一郎

私は現在、東北大学の硬式野球部に所属しており、同じ水戸一高出身の投手高橋朋宏、外野手和田智樹とともに野球を続けています。

東北大学の硬式野球部は、仙台六大学リーグに所属しております。そこは、プロ野球選手も多く輩出している東北福祉大学や、私立大学野球部として屈指の歴史をもつ東北学院大学など、レベルの高い大学も所属するリーグです。今でこそ決して強いとはいえない東北大学ですが、そういった強豪を相手にできることもあり、高いモチベーションを部員一人一人がもちながら日々の練習に取り組んでおります。今年は私にとって最後の年になりますが、20 年以上なしえていない A クラス入りという目標を掲げております。私も副主将としてチームを引っ張り、目標達成に向けて精進して参ります。

ここで、私が上級学校でも野球を続けようと考えたきっかけを思い返すと、多くの方の後押しがあったことや、夏の大会で負けた悔しさというものが大きかったと感じます。しかし、本当に野球を続けようと決め、今もなお続けている理由は野球が好きだからというものに限ると思います。他の選手を見ても、本当に野球が好きな人たちが集まっているのだと感じますし、そういった環境に身を置けることはとても幸せです。多くの選択肢があり、自分の進みたい道を自由に決められる大学だからこそ、野球を続けるという選択をさせるのは、悔しさや自分の持っている技術だけではなく、野球が好きだという気持ちなのだと感じています。

もちろん野球が好きでそれができるのが楽しいというだけではなく、大学野球ならではの楽しみや学べることも多くあります。大学野球はリーグ方式で、同じ相手と複数回戦うことができます。一度は負けた相手でも、相手投手のもつ球種や配球の癖、打者の傾向などを研究し、対策を立てて練習を重ねるということが可能です。これは今まででではなかなかできなかったことだし、そうして勝てたときは喜びも一際です。また、練習メニューを自分たちで組むため、目標から逆算して計画を立てるという経験も得られます。それと同時に、合宿の手配をしたり、部費の管理をしたりと、部の運営も自分たちで行うことになりますが、こうした経験は今後にも必ず生きてくるものだと思います。

後輩たちの中で、これから野球を続けるか迷っている人も、また一つレベルの高いところで野球をすることに不安を感じている人も、もし野球が好きだという気持ちがあるなら、ぜひ足を踏み出してみてほしいと思います。

最後に、日頃から三の丸倶楽部の皆様にはご支援いただき厚く御礼申し上げます。これからも何卒ご指導・ご鞭撻の程よろしくお願いいたします。

平成 28 年 8 月 11 日七帝戦（対大阪大）で
一年生ながら出場しショートを守る

Ⅴ　硬式野球部　名簿

（敬称略）

部長　小島 淳　　監督　竹内 達郎　　顧問　武士 敬一　太田 泰助

主将
蒲原　大稀
稲田中
外野手・投手

雨谷　俊太郎
笠原中
内野手

飯村　颯太
茨城大附属中
投手

井坂　史周
笠原中
外野手

岡野　楽
笠原中
内野手

小沼　瞭太
千波中
捕手・内野手

片根　崇行
城里常北中
投手・外野手

副主将
吉川　俊
水戸三中
外野手

黒崎　宗矩
多賀中
内野手

橋爪　健宏
勝田二中
内野手

三浦　健太郎
平沢中
外野手

柳田　綾乃
駒王中
マネージャー

<<<<　二年生

一年生　>>>>

青山　拓矢
多賀中
内野手

副主将
折橋　秀哉
佐野中
副主将・内野手

川勾　恒太郎
茨城大附属中
内野手

見坂　恒輝
八郷中
内野手・外野手

古谷　崇晃
下館中
捕手・内野手

佐次　泰晟
下館中
投手・外野手

田中　広海
水戸一中
内野手

豊田　楓斗
坂本中
外野手

前田　知哉
友部二中
投手

宮野　礼門
茨城大附属中
外野手・投手

Ⅵ　試 合 結 果 ・ 予 定

平成30年度後半　公式戦･準公式戦･定期戦結果				
月	日（曜）	大　　会	球　場	結　　果
9	10(月)	秋季地区ー回戦	県営	○5－ 4緑岡
	11(火)	〃　代決戦	〃	●1－11水戸葵陵
10	25(木)	ー年生大会ー回戦	水戸農	○8－ 1鹿島
	28(日)	〃　二回戦	水城	○5－ 4緑岡
	29(月)	〃　三回戦	〃	●3－10水城
11	18(日)	創立140周年記念	ﾉｰﾌﾞﾙｽﾀｼﾞｱﾑ水戸	●0－10作新学院
	23(祝)	水商定期戦	常銀平須	●1－ 5水戸商
1	2(水)	豚汁会	水戸ー	●4－ 6水府倶楽部

平成30年度後半　練習試合結果			
月	日（曜）	球　場	結　　果
8	29(水)	守谷高	○4－2守谷
			○9－1 〃
9	16(日)	つくば国際	●8－10つくば国際
			○7－ 4　〃
10	7(日)	取手二	● 4－ 5取手二
			●10－11松戸馬橋(7回終了)
	8(祝)	常総学院	●3－ 5柏中央
			●3－20常総学院
	21(日)	牛久栄進	○11－5牛久栄進
			● 0－2日立ー
11	11(日)	太田ー	●3－5太田ー
			○6－4 〃

平成31年前半　試合予定（平成31年2月15日現在）		
月	日（曜）	大会・試合・会場等（V:相手高G, H:水戸ー高G)
3	10(日)	練習試合　清真･波崎柳川(V)
	23(土)	練習試合　安積(H)
	24(日)	練習試合　勝田(V)
	26(火)	練習試合　水海道ー(V)
	28(木)	練習試合　花巻農(H)
	29(金)	練習試合　佐久長聖･弘前･柏木農(H)
4	2(火)	練習試合　磯原郷英(V)
	4(木)	練習試合　石岡ー(V)
	11(木)	地区大会組合せ
	13(土)	地区大会　～17(水)
	19(金)	県大会組合せ
	25(土)	県大会　～5/6(祝)
5	4(土)	練習試合　土浦ー(V)
	5(日)	練習試合　宇都宮(H)
	12(日)	練習試合　緑岡(H)
	18(土)	関東大会　～5／22(水)埼玉県
	26(日)	練習試合　つくば国際(V)
6	1(土)	市内大会　～4(火)
	9(日)	練習試合　佐原(H)
	21(金)	茨城大会組合せ抽選会
7	6(土)	茨城大会　～7／24(水)

三の丸倶楽部

顧問：稲葉節生（S38年卒元茨城県教育長）
会長：鬼澤邦夫（S38年卒常陽銀行会長、知道会会長）
事務局長：森利克（S38年卒）
幹事：
照沼貞夫（S47年卒、H20年卒父母会）
池永充宏（H23、24年卒父母会）
船橋信正（S63年卒、水府倶楽部）
飯田芳久（H元年卒）
馬場威彦（H30年卒父母会長）

////// 会員を募集しています//////////
◇水府倶楽部（野球部OB会）及び現野球部父母会の会員以外どなたでも入会できます。
◇特典：会員帽子（入会時）の配付、会報（年２回）の送付など
◇年会費：一口　３,０００円（何口でも可）
◇振込先：常陽銀行本店営業部
普通　２９４５６１９
サンノマルクラブ
◇手続き：氏名、住所、TEL番号、メールアドレスを下記までご連絡ください。
森利克
Tel/Fax：0294-53-1351
E-mail：ihm2158@ak.wakwak.com

編集後記